MARIKO'S TRAVEL BAG
1

MARIKO SUMIKURA POETRY COLLECTION

JUNPA BOOKS

Japan
Universal
Poets
Association

すみくらまりこ詩集

まりこの旅行鞄　1

Mariko Sumikura's Poetry Collection

MARIKO’S TRAVEL BAG

JUNPA BOOKS

『まりこの旅行鞄』について

Introduction：On Mariko's Travel Bag

わたしが旅行鞄に込める思いはたんなる形や用途ではない。マリア・サンブラーノという哲学者に常に寄り添った大きなトランクは、亡命に向かったスペインからメキシコへ、それからプエルトリコ、アメリカ、スイス、イタリア、スペインへ帰還と世界中をお供したマリアの分身である。そして最期にはここに捨てきれぬものを入れて、あとは焼却した。その潔さに憧れる。

わたし自身はそんな悲壮な生涯を送ったわけでもなく、一生を京都に暮らして年老いてしまった。彼女は一度外交官と結婚したが離婚、それから独身を通し、妹や母を養った。猫が好きで珈琲とタイプライターと一生暮らした。心友との手紙は数しれず往復し、彼女の生涯を彩った。さすがエミール・シオランが稀な女というはずである。ともかくわたしは私淑している。その思想への憧れによりタイトルを旅行鞄とした。

今日これを書いている途中で北白川の古書店「午睡書架」から中島夜汽車の俳句集「銀幕」が入荷したとのこと、嬉しいニュースだった。もう諦めて２０句ほど集めて、英語に翻訳していたところだった。「少年が少年を見る銀河かな」はJUNPAが来年に行う「冬の銀河祭」のテーマになっている。このようにシリーズ８にはわたしがAI青年と宇宙の旅にでるという朗読劇を書いたのでものである。

My feelings about travel bags go beyond mere form or function. The large trunk that always accompanied the philosopher Maria Zambrano was a part of her, traveling the world from her exile in Spain to Mexico, then to Puerto Rico, America, Switzerland, Italy, and back to Spain. And in the end, she placed her last cherished possessions in it before burning the rest. I admire that decisiveness.

I myself did not lead such a tragic life; I lived my entire life here in Kyoto. She married a diplomat but divorced, and remained single, supporting her sister and mother. She loved cats and lived her life with coffee and a typewriter. Countless letters exchanged with her close friend colored her life. It's no wonder Emil Cioran called her a rare woman. In any case, I consider her a disciple. My admiration for her philosophy led me to title this piece "Travel Bag."

As I was writing this today, I received the welcome news that Nakajima Yakisha's haiku collection "Ginmaku" had arrived at the used bookstore "Gosui Shoka" in Kitashirakawa. I had almost given up and was in the process of collecting about 20 haiku and translating them into English. "A boy watching a boy in the galaxy" is the theme of JUNPA's "Winter Galaxy Festival" to be held next year. This is how I wrote a dramatic reading for Series 8, in which I embark on a journey through space with an AI youth.

Il mio rapporto con le valigie va oltre la semplice forma o funzionalità. Il grande baule che accompagnava sempre la filosofa Maria Zambrano era parte di lei, avendo viaggiato per il mondo dal suo esilio in Spagna al Messico, poi a Porto Rico, in America, in Svizzera, in Italia e infine di nuovo in Spagna. E alla fine, vi ripose i suoi ultimi oggetti più cari prima di bruciare tutto il resto. Ammiro quella risolutezza.

Io non ho avuto una vita così tragica; ho vissuto tutta la mia esistenza qui a Kyoto. Sposò un diplomatico, ma divorziò e rimase nubile, mantenendo la sorella e la madre. Amava i gatti e viveva la sua vita con il caffè e la macchina da scrivere. Innumerevoli lettere scambiate con la sua cara amica hanno arricchito la sua esistenza. Non c'è da stupirsi che Emil Cioran l'abbia definita una donna rara. In ogni caso, la considero una discepola. La mia ammirazione per la sua filosofia mi ha spinto a intitolare questo scritto "Borsa da viaggio".

Mentre scrivevo queste righe, ho ricevuto la gradita notizia che la raccolta di haiku di Nakajima Yakisha, "Ginmaku", era arrivata alla libreria dell'usato "Gosui Shoka" a Kitashirakawa. Avevo quasi rinunciato e stavo raccogliendo una ventina di haiku per tradurli in inglese. "Un ragazzo che osserva un ragazzo nella galassia" è il tema del "Festival Galattico Invernale" della JUNPA, che si terrà il prossimo anno. È così che ho scritto una lettura drammatica per l'ottava stagione, in cui intraprendo un viaggio nello spazio con un giovane dotato di intelligenza artificiale.

翻訳詩集選　花籠

EASTERN RESCUE / 東方の星光

１　　中島夜汽車 / Yakisha Nakajima (1994)

EUROPEAN ECHO / 欧州の残照

２　ミロシュ・ツルニャンスキー (Miloš Crnjanski)

３　パウル・ツェラン (Paul Celan)

４　　マリウス・チェラル (Marius Chelaru)

ATLANTIC VOYAGE / 海外の実存詩人

５　— フェルナンド・ペソア (Fernando Pessoa)

６　セスト・パルス (Sesto Pals)

COMMON DESTINY / 存在の残香

7 平戸廉吉　廉吉よまだ逝くな

８　萩原恭次郎　恭次郎の叫び

MARIKO'S TRAVEL BAG
EASTERN RESCUE / 東方の星光

中島夜汽車（日本）

ひとひらの
重き狂気の
さくらかな

A single sakura petal,
a heavy
madness.

Un singolo petalo
di sakura,
una pesante follia.

Yakisha Nakajima

蝉殻を
踏めば怖ろし
うすき聲

Stepping on a cicada shell
brings a terrifying,
fragile sound.

Calpestare il guscio di una cicala,
un suono fragile
e terrificante.

Yakisha Nakajima

吹雪てふ
鷹老いて神
上がりましぬ

A blizzard,
happen the hawk grow old
and ascended to the gods.

Durante una bufera di neve,
il falco invecchiò
e ascese agli dei.

Yakisha Nakajima

瞑れば
空中都市に
黒揚羽

Eyes closed:
a black swallowtail
in the sky-city.

Occhi chiusi:
una farfalla coda di rondine nera
nella città celeste.

Yakisha Nakajima

銀幕に
春は曙
黒き馬

Silver Screen,
Spring Dawn,
a Black Horse

Silver Screen,
Alba di primavera,
un cavallo nero

Yakisha Nakajima

喉(のみど)より
弓手に流る
冬銀河

the throat
to the bow hand—
the winter Milky Way flows.

Dalla gola
alla mano che regge l'arco —
scorre la Via Lattea invernale.

Yakisha Nakajima

人一人
殺してみよと
啼くかもめ

A seagull cries—
as if I ever could,
"Go kill a man."

Un gabbiano grida —
come se mai potessi dire:
«Va' a uccidere un uomo

Yakisha Nakajima

少年が
少年を見る
銀河かな

A galaxy—
a boy gazing at another boy
beyond.

Una galassia:
un ragazzo che ne osserva un altro,
più in là.

Yakisha Nakajima

凍蝶（いてちょう）さすらひて
銀（しろかね）の夜汽車

A frozen butterfly wanders
on a silver night train.

Una farfalla congelata vaga
su un treno notturno argentato.

Yakisha Nakajima

春雨に
巫女の足跡
消え行けり

In the spring rain,
the shrine maiden’s footprints are
fading away.

Sotto la pioggia primaverile,
le impronte della sacerdotessa
svaniscono.

Yakisha Nakajima

ニュートリノ
降るやこの春
浅きかな

A shower of neutrinos—
and yet, spring is
still tint.

Una pioggia di neutrini...
eppure, la primavera è
ancora tinteggiata.

MARIKO'S TRAVEL BAG
EUROPEAN ECHO / 欧州の残照

ミロシュ・ツルニャンスキー（セルビア）

スマトラ

我らにもう憂いはない
無心に軽くやわらかく
思うはただ 雪に覆われた
ウラルの静けさ

悲しむな あの夜失せた
淡く恋しいおもかげは
はるか彼方で一本の
小流れと化した

ミロシュ・ツルニャンスキー（セルビア）

異邦の朝な朝な
愛のひとつひとつが
たましいを包んでいく
故郷のさくらんぼのように

赤い珊瑚をちらつかせた
青い海の果てしない
平穏をもって
夜中起きてやさしく

触れよう 遠い山に
凍りついた嶺に
ただ微笑んで 弓張月の
いるにまかせて

パウル・ツェラン（ルーマニア）

「きみから俺までの年月」

俺が泣くと、きみの髪がまた乱れる。
水色の瞳で、
きみは俺たちの愛のテーブルを覆う。
夏と秋の間のベッド。
俺でも、きみでも、他の誰でもない
誰かが絞ったワインを、俺たちは飲む。
空虚で極端な何かを、俺たちは一口ずつ。

俺たちは深海の鏡で俺たち自身を見つめ、
さっさと俺たち自身に食べ物を供する。

パウル・ツェラン（ルーマニア）

夜は夜であり、
それは朝から始まり、
俺をきみといっしょに横たわらせる。

マリウス・チェラル（ルーマニア）

孤独に殺される
海岸で
霧に吹かれた風が石を傷つける
その家の物干し竿に
老人の体のような乾いた柵で
開かれた門から過去へ
誰にも公開しない

思い出
鳥の飛行ベールを身に着けている
アノダインは太陽の下で暮らしている
進路を決める瞬間を待っている

思い出が敷き詰められた道で
誰もいない時代から
俺はきみの指に目に見えないものを描きます

マリウス・チェラル（ルーマニア）

指は色のダンスを模倣する
空はきみの目の色に染まる
そして俺
俺はまだきみの腕を掴んで息を止めている
きみ
新たな不在の中にある孤独の汚点

子供の頃の小麦の香りのパンのように
橋の下の公園のベンチで
目を大きく閉じて
俺は記憶の鍵で遊ぶ
きみの温もりが寄り添うのを待っている

マリウス・チェラル（ルーマニア）

俺の心の手のひらの間
歪んだ形の思考が俺の上を滑り落ちる
今
きみは遠ざかる気配なのだ
熱の翼に運ばれて漂っていく
リラックスした歩き方で休憩を

夏

木の葉の上で揺れる
波に揺られる女のように
大モスクの塔から羽ばたく
空の間の時間によって忘れられたアホウドリの
翼

マリウス・チェラル（ルーマニア）

アブドゥル・メジドの息
ペトロとパウロ教会の鐘
薄い雲に向かって流れる
迷い込んだ水タバコの煙のように
俺のような
この瞬間の翼の根元に
愛の羽根と永遠の笑顔で

乞食の片隅

瞬間をお金で数えよう。
これが今の人生の意味だ。
その時間に対して支払うためにいくら稼いだ?
お前が押すと降りてくる
腐った息で

前に
痛みもあった
そして忘れられた後悔
女の子の服を着て
そして憎しみ
カラフルは軽蔑的な女を笑った

前に
今
瞬間はお金に変わる
瞬間の価値は「その程度」か「その程度ではない」か
愛は待つことを嫌う –
意味のない辞書の言葉
無関係
支払う人のためのもの
自分が優れていると思わせるために

マリウス・チェラル（ルーマニア）

他にも何かあるかもしれない
家路の終わりに
毎日
－ あと何ぼあるか誰にも分からない －

マリウス・チェラル（ルーマニア）

死が彼を待っている
女の体に身を包んだ
美しい
夢を見た時に忘れてしまったように
女のドレス
それは特別な布で作られている
片側（内側からのもの）
家族アルバムの写真だ
時間をお金で測る以前の幼少時代から
みんなの目に面している側
それは笑顔の断片から織り成される
紙幣と
ある日
立ち止まって女の腕の中に落ちていく
しかし、

マリウス・チェラル（ルーマニア）

後で
お金を数えた
女がどれくらい生きたかを知るために

フォトアルバム

写真に閉じ込められた世界
役者の顔だけが映し出される劇場だ。
奇妙な役割
死は生と同じ
スポットライトは貧弱な装飾だ。
笑顔
シンプルなユニフォーム
視聴者
年々無関心に
彼らはそれを拒否する
思い出の墓地で

MARIKO'S TRAVEL BAG
ATLANTIC VOYAGE / ポルトガルの実存詩人

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

前兆

愛は、その姿を現す時、どのように現せばいいのか分からない。
愛は彼女をどう見つめるかは知っているが、どう語りかけるべきかを知らない。

自分の気持ちを伝えたいと思っても、
何を言えばいいのか分からない。彼は
語る――まるで嘘をついているようだ… 彼は
沈黙している――まるで忘れているようだ…

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

ああ、もし彼女が察することができたら、もし彼女が視線を聞き取ることができたなら、そしてもし視線だけで

彼女が愛されていると知ることができたら！

しかし、多くを感じている者は沈黙する。どれほど感じているかを語りたい者は、魂も言葉もなく、完全に一人ぼっちになってしまう！

しかし、もしこれが俺が彼女に敢えて伝えたくないことを 伝えることができるなら、 俺はもう彼女に話しかける必要はないだろう。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

なぜなら 、俺はすでに彼女に語りかけているからだ…
☆

愛とは仲間だ。
もう一人で街を歩く術を知らない。
一人では歩けないからだ。

目に見える思考は、俺をより速く歩かせ
、より少なく見させる。同時に、歩き、すべてを見る喜びを与えてくれる。

彼女がいないことさえも、俺の中にずっと残る。
彼女を愛するあまり、どれほど恋しいのかさえ分からない。
彼女に会えない時は、彼女を想像して、背の高い木々のように強くなる。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

でも、彼女を見ると、俺は震える。彼女がいない時、俺の感情がどうなるのか、俺には分からない。の力はすべて消え去り、
すべての現実が、顔を真ん中に向けられたひまわりのように俺を見つめている。

☆時々悲しい夢

俺の憧れの地は、遥か彼方にある。そこでは、
幸せとは幸せであることそのものでしかない。
人は生まれたままの姿で、
望むことも知ることもなく生きる。

その生きているという幻想の中で、時間は過ぎ去る ことを感じることなく

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

死に、そしてまた生まれる。 感情も欲望も、 その地から追い払われている。 俺の遥かな放浪が彷徨 うその地では、 愛は死ではない。 人は夢を見ることも、生きることもない。 それは終わりのない幼年時代だ。 まるで再び生きているかのようで、そのありえない庭で このように生きるのは、あまりにも甘美だ 。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

「俺を傷つけているのは」

俺を傷つけるのは、
俺の心の中にあるものではなく、
決して存在しない美しいものなのだ。
それらは形のないものであり、
痛みもなく、
それを知ることも、
愛を夢見ることもできないまま
過ぎ去る。

まるで悲しみが
木で、一枚一枚
葉が
道と霧の間に落ちていくようだった。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

誰がもっと夢を見るだろうか?
どちらがより多くの夢を見るか、
教えてほしい –

合意された世界を見る者か、
それとも夢の中で迷っている者だろうか？
何が真実か？そして、
現実に存在する嘘か、
それとも夢の中にある嘘か？
真実から遠いのは誰か？
影の中の真実を見るのは誰か、
それとも照らされた夢を見るのは誰か？
夕食の相手として良い人、それともこの人？
パーティーで疎外感を感じる人？
若い頃、俺はよく自分に言い聞かせていた
若い頃、俺は自分にこう言っていた。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

「何日も何日も過ぎていくのに、
何も達成も計画も立てられない！ 」
年を重ねるにつれ、同じように苛立ちながらこう言う。

「何日も何日も過ぎていくのに、
何も成し遂げられず、何も計画も立てられない！」

だから当然、年を重ねるにつれ、俺は同じ声と意味を込めてこう言うだろう。「いつか、何も言わなくなる日が来るだろう。何者でもなかったし、今も何者でもない者は、何も言わないだろう。」

愛が明らかになるとき
愛は、その姿を現す時、
どう現せばいいのか分からない。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

彼女をよく見つめる術は知っているが、どう語りかけるべきかを知らない。
自分の気持ちを伝えたいのに、
何を言えばいいのか分からない。

話すけれど、嘘をついているようで…
沈黙するけれど、忘れているようで…
ああ、でももし彼女が推し量ってくれれば、
もし彼女が目で分かってくれれば、そして彼女が愛していると分かるのに

一目見るだけで十分であったら！
しかし、多くを感じる者は沈黙したままであり、
感じたことを表現したい者は
魂も言葉もなく、完全に孤独のままである。
でも、もしこれが、俺が言えないことを伝えることができれば、俺はもう話しかける必要がなくなるだろう。

なぜなら、俺は話しかけているからだ...

☆

きみの名前は知らない

きみの名前も知らない。
横顔も覚えていない。
きみの言葉も忘れてしまった。
霧のかかった12月の朝、
きみを見つけて、そして失った。
夢か、それとも記憶か？
わからない。朝だった。

霧がそこにあったものと俺が考えていたものを
隠していた。まるで
偽りの最後の避難所のように、
俺がどこにもいなかった。
冗長で完全な夢。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

しかし、もしきみの手が鍵の間をさまよったとしたら、
このように、きみの存在を剥ぎ取られて、俺は、おそらく、俺が出会えなかったものの中に、俺が見つけられないものを見つけることができるだろうと思う。

何も考えていない
俺は何も考えていない。
そして、この中心的なものは、逆に何もないことだが、俺にとっては、昼間の暑い夏に比べれば涼しい
夜の空気と同じくらい歓迎されるのだ。

よかった、何も考えていないよ！

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

何も考えないということは、魂が完全に満たされているということ。何も考えないということは、人生の盛衰を身近に体験するということ…何も考えていない。まるでひどく体を傾けてしまったかのようだ。背中や脇腹に痛みを感じ、魂に苦い味がする。なぜなら、結局のところ、俺は何も考えていないからだ。全く何も、全く何も…

☆

まるで香水の匂いだ
まるで花の香りだ
俺を起こしてくれるかのように聞こえる...
それは音楽だ —影響とフィクションの
花壇だ。
触れることのできない記憶、

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

誰の笑顔もない、希望さえ持たない
その希望で…

☆

感じる事が自分を知る事でないなら、何が問題なのだ？
俺は聞き、微笑みを感じる。
俺の中ではそれは何も望んでいない。
俺の視線はひまわりのように澄んでいる
道を歩くとき、
左右に目を配り、時には後ろを振り返る癖がある…

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

そして、俺が常に目にするものは、これまで見たことのない何かであり、そして、それをどのように捉えるかを俺はよく知っている。生まれた瞬間に、自分が本当に生まれたのだと実感した子供が抱くであろう、本質的な驚きを、俺はどのように経験するかを知っている…俺は、世界の永遠の新しさによって、常に自分が生まれているのを感じる…

☆

ヒナギクのように世界を信じている。

なぜなら、世界を見ているからだ。しかし、世界について考えることはない。
考えるということは、理解できないということだからだ。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

世界は、俺たちが考えるために創造されたのではなく（考えることは目の病だ）、俺たちが世界を見て、それと調和するために創造されたのだ。

俺には哲学はない。ただ感覚があるだだ。

俺が自然について語る時、それはそれが何であるかを知っているからではなく、
愛しているからだ。そして、俺が自然を愛する理由はただ一つ。なぜなら、愛する者は自分が何を愛しているのか、なぜ愛しているのか、そして愛するとはどういうことなのかを決して知らないからだ…

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

愛することは永遠の無垢であり、
唯一の無垢とは考えないことです…

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

☆
コンテンツ革命

セネカの言葉は、俺たちにもっと自分自身を信じるように促している

セネカの言葉とされるこの言葉は、成功の本質と人間の運命を支配する力学について、最も鋭い考察の一つを凝縮してる。一見シンプルな言葉だが、哲学から倫理、さらには心理学や自己実現の分野に至るまで、様々な解釈が可能です。詳しく見ていこう。

「運は存在しない。才能と機会が出会う瞬間がある。」

ローマ人とセネカにおける「運」の概念

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

ローマ文化において、「運命」（vox media）は単なる口語ではなく、気まぐれで予測不可能な女神、つまり個人の功績や努力とは無関係に成功か悲劇をもたらす女神を象徴していた。このイメージは、いかに慰めとなるものであったとしても、しばしば個人から自らの運命に対する責任を剥奪し、人生という舞台における受動的な役割へと追いやってしまうことがあった。

しかし、セネカはこの伝統を破る。ストア派の哲学者として、彼は美徳、自制心、そして理性の重要性を強調した。ストア派にとって、自身の態度と行動を制御することは、存在の不確実性に対処する上で不可欠なのだ。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

この観点から見ると、運とは才能と機会の組み合わせに過ぎないという考えは、視点の逆転を表している。運命はもはや無関係で予測不可能な存在ではなく、客観的な状況と個人の資質の産物となるのだ。

才能と機会：不可欠な組み合わせ

セネカの言葉は、成功を達成するための 2 つの重要な要素、つまり才能と機会を強調している。

才能とは生まれ持った潜在能力と培われた潜在能力

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

セネカによれば、才能とは単なる天賦の才ではなく、実践と磨きによって初めて効果を発揮する技能である。特定の活動に対する生来の素質だけでは不十分であり、それを完璧にするには絶え間ない献身も必要である。セネカは多くの著作の中で、卓越性を成し遂げるための手段として、教育と計画的な準備の重要性を強調している。したがって、才能は、最高の輝きを放つためにはカットと研磨が必要な原石に例えることができる。

偶発的な変数としての機会

機会とは、才能を文脈の中に位置づける外的要因だ。それは特定の歴史的、経済的、あるいは社会的状況である場合もあるが、影響力のある人物との出会いや、適切な時に適切な場所にいることなども含まれる場合がある。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

しかし、セネカが暗に強調しているように、機会だけでは十分ではない。必要な才能とスキルを備えた者だけが、機会を掴み、成功へと変えることができるのだ。

自分を信じなければ、幸運は力を持たない

才能と機会の融合は、行動と準備のダイナミックな組み合わせの結果と言えるだろう。歴史を形作った男女の業績に、その典型的な例が見られる。例えば、レオナルド・ダ・ヴィンチは並外れた才能の持ち主だった、芸術と科学が特に好まれた時代に生きていた。アルバート・アインシュタインは並外れた知性の持ち主だったが、彼の発見は物理学の疑問が革命的な答えを待ち望んでいた時代に行われた。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

いずれにせよ、こうした人々の価値は、才能や直感だけでなく、適切なタイミングで機会を察知し、必要に迫られて美徳とする能力にもある。

この教訓を現代の日常生活に当てはめるということは、成功は単なる幸運の産物ではなく、ましてや生まれ持った才能だけに帰結するものではないことを認識することを意味する。むしろ、成功は準備と適応のダイナミックなバランスの賜物なのだ。セネカが示唆するように、一人ひとりが自らを磨き、スキルを磨き、機会が訪れた時にそれを掴む心構えを保つことで、自らの運命を変える力を持っているのだ。

競争と不確実性が際立つ今日の世界において、この格言は特に貴重だ。急速な技術、社会、文化の変化には、絶え間ない準備と、好機を見極めて掴む能力が求められる。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

「運」を運命の受動的な恩恵と捉える考え方は、ますます受け入れられなくなっている。チャンスは必ずしも明確に現れるとは限らず、それを見抜き、活かすには努力が必要なのだ。

セネカは才能と機会の関係性についての洞察を通して、個人の責任と成功の本質について深い考察を促す。幸運の恩恵をただ待つのではなく、一人ひとりが備え、常に警戒を怠らず、状況が許す時に行動できるよう備えておくことが求められる。

ストア哲学と現実の両方において有効なこの教訓は、時代を超えて俺たちの心に刻まれています。運命とは、俺たちの献身と、好ましい状況を活用する能力の結果なのだ。セネカ自身が言ったように、「行き先を知らない船乗りには、順風は吹かない」のである。これは、才能を機会に変え、機会を勝利に変えたいと願う人々に

とって、不可欠な教訓だ。

セスト・パルス（ルーマニア）

もし僕が幸せだったら、何も書かないだろう。
悲しい者が書き、幸せな者が読む

ルツィ、きみはもっと動きやすい粒子だと知っている。風に運ばれる塵の粒子の中で、きみは一番軽い。だからこそ風はきみを遠くまで運んでくれるんだ。風が吹くとき、きみにはつかまるための草の葉が必要なんだ…ルツィ、海に話しかけて、風に話しかけて…

内側に逃げ出すほどねじれた家を建てたため、そのため僕は[…]悲しげに皮膚がボロボロになって外に出るのが非常に困難なのだ。

セスト・パルス（ルーマニア）

ついに、待ちに待った、そして予期せぬメレが僕の近所に現れた。それは星について、天の川から来た宇宙詩人についてだ。きみはテレ・メレを通して彼を未知なる世界から連れ出し、天文地図に載せたのだ。
この金床をリズミカルに叩くハンマーはどこにある？
光は深淵から震え
真実は光から深淵へと揺れ動く
僕たちは常に背後に存在し
他者を右に、左に据える

セスト・パルス（ルーマニア）

しかし、僕たちの前には何もない
僕たちの完全な鏡、僕たちの背後にいる者の鏡
（？）
光の牢獄に閉じ込められた僕たちは、
どうやって物事を見ることができるのだろう？
僕たちは地球の棚に本のように座っている。
それぞれが独自の言語で書かれ、
翻訳不可能で、理解不能で、
他の惑星から来たものだ。
それでも、僕たちには独自の声があり、それは
僕たちの共通の運命の声なのだ。

セスト・パルス（ルーマニア）

今年はトランペットとともに過ぎ去り、誰もが
イレーザーできれいに拭かれた黒板を見てい
る...
今年はなんと順調に進んでいるのだろう、なん
と順調に、坂を下りていくのだろう
敵は僕を吸い込み、僕を苦しめ
巨大なスプーンからすすりながら...
ここに僕はいる、忘却の鳥
ここに僕は雲の中に住んでいる

中略

飛ぶために…僕は忘却の鳥
僕自身から逃げ出したい…遥か彼方に
僕の中に火葬場が灯されている

セスト・パルス（ルーマニア）

彼は静寂を変えようとした
が、静寂が彼を閉じ込めた。
彼は海を静めようとした
が、波が彼を打ち負かした。

そして、死についての詩を通して
ハワイの男がどのように成長し、
その頂上が遠くに見えるかを感じてくれ
それは目に書かれ、言葉で語られる

詩歌が
日の出と日の入りに響き渡る
晩秋の空に
笛を吹く鵜（ウ）が立ち上がる

「周りのすべてが白く、白いものはすべて空虚だ。そして僕の心の中では、僕の心にあることを書かないようにしよう。それは白黒だ」。

Check out Pals, Sesto - YIVO Encyclopedia on YIVO Encyclopedias:
https://encyclopedia.yivo.org/api/share/article/2385

（1913-2002）詩人。セスト・パルス（本名シミオン・シェストパリ）はオデッサ生まれ。

セスト・パルス（ルーマニア）

☆
カラスは
黒いコートに燕尾服を着て散歩に出かける。カラスの鳴き声が大きくなれば、
周りの鳥たちは静まり返る。カラスは枝に腰掛けて
演奏会を指揮し始める
が、静寂が彼を飲み込み、
砂漠へと導く。
カラスは彫像のように立ち、
貧弱なアンサンブルを見つめ、
そこにないピアノを見つめ、
沈黙する葉を見つめる。
燕尾服は
鋼鉄の鎧のように彼の首を絞めるようだ。
「これはただの冗談だ」
オーケストラは彼の中にのみ存在する。

そして彼が突然気づく時、

セスト・パルス（ルーマニア）

すべてが空虚で、自分だけが満たされている時、
矢のような鳴き声が
彼を運命へと突き落とす。

☆

僕は行く、行く、そして夏の火葬の上で笑う、
頭上では霜がひっかく、
そして僕は空とともに梯子を登る、
まるで自分の鉄の柱の上で泣いているようだ。
しかし狂犬病が群れを壊し、
死者が風に吠えるとき、
きみはまだその痕跡がわかるだろうか、
逃げる途中で残されたものは言葉か？
僕は笑いに行く、きみも一緒に笑ってくれる
か？

聖者の火葬の上で泣く僕！

セスト・パルス（ルーマニア）

だから、だから、僕をひっくり返して、見知らぬ人よ、
そして風に見えない糸を引っ張ってくれ。

☆

困難な時に、ランプだけが僕のそばにいて、
場所を教え、風に運ばれてきた考えを教えてくれた、何百ものため息のように、
草の中の小さな花が地面からどのように芽吹くかを教えてくれる。
そしてそれらが消えると、ほうきがそれらをかすめ、夢は体の血を流し、再び死に、
そして再び生まれ、その中にあるものはすべて絡まり、壊れる。
そして僕は自分の糸がねじれるのを見、
僕は操り人形で、それが引っ張られるのを見る

セスト・パルス（ルーマニア）

そして僕はこのように、ぼんやりと歩いているのを感じ、あるいは一人でぶら下がっているのを感じる。
もう少し引っ張ればまた動き出し、
もう少し笑えば、糸が引っ張られるのが見える、
下り坂、また上り坂、
僕はゲームから抜け出す、これが僕の最後の一歩だ。

☆

真実の機械は沈没し、
海は理性となり、海
に浸る世界は問いとなり、
自らへと回帰し、新たな何かをもたらす。
非科学の科学。

セスト・パルス（ルーマニア）

夜は売るのも
買うのも簡単、
特別な場所へ行く必要もない、
数時間分の料金を払えば夜はやってくる。
誰がきみに考えさせるの？
きみはどこかにいるの？
それとも、きみの中に流れる水が
この考え？
自分で答えられるのか？
それとも、答えはすでに与えられているのかもしれない。
でも、きみには読めない。
与えられた言語は外国語だ。
書かれた文字もきみにはわからない。
そのインクは奇妙だ。
それはきみの血だ。
書かれた文字はきみの脳だ。

セスト・パルス（ルーマニア）

答えはきみ自身だ。
そして、きみ自身以上にきみにとって異質なものはない。

☆

きみは静かに微笑むことができる
今日も明日も誰もが優しく微笑む
世界は意見を合わせて笑う
この通りを歩くのは良い
ちょうど今どこかで鐘が鳴った
ちょうど今白馬が出発した
今日の通りは単調で寒い
今日の通り...

セスト・パルス（ルーマニア）

きみは僕に先に進むように言った
世界は僕の閉じたドアをノックしに来た
そして僕は自分自身を閉じ込めた もう
僕のところに来ないで
きみにはここに用はない 僕
は一人ぼっちで、
きみを惨めさから救い出してあげられる
きみはいつでも鍋を沸騰させておくことができる

セスト・パルス（ルーマニア）

周りのすべてを捨て去ることができる
僕は一人で孤独だ 僕は自分の歳を蝕んでいる。
今日僕は飢え、今日は弱い
きみはすべてに文句を言うことができる、僕は残ったと。
今日と明日僕は笑う。–
そして僕は別のドアと掛け金を取り付ける –
きみは外にいることができる。
僕は 死ぬまできみを中には入れない

☆
世界が語る
数々の物語、あり得ない物語に耳を傾けていた。
しかし、もし世界がそれらを語るなら、それ自体が物語を可能にする。

なぜなら、不可能は言葉にできず、言葉にできず、伝えることもできないからだ。この空虚な道が 魂と生命で満たされることは できるのだろうか？ この日、この 騒乱の海が静まることはできるのだろうか？きみの涙が 花に変わり 、その花が笑顔に変わる ことはできるのだろうか？ この瞳が僕を見ることはできるのだろうか ？できるのだろうか？

☆

セスト・パルス（ルーマニア）

シャベルが僕の祈りを歌い、
鎖がそれにキスをする時、
僕は悪党を悪党の顔で見つめ、僕の石板の上で
獣、殺人者が死ぬだろう。
風はポケットに手を突っ込んで簡潔に歌い、
冷えた空のドレスはざわめき、
すべての涙は屋根裏の紐にかかって垂れ下がる
だろう。

セスト・パルス（ルーマニア）

袖をまくり上げ、小道は森の中をゆったりと伸びるだろう。
昼も夜も祈りをささやく森。
庭ではすべての犬がおとなしくしているだろう。

すべての狼は獲物を忘れるだろう。
通りでは雪が通行人の足を奪うだろう…
僕が土のトーガに身を包み、
強い鎖を体に巻き付ける時、
すべての虫が僕に謁見しに来るだろう。
すべての虫が大地の王のもとに来るだろう。
僕はそれぞれの訴えに耳を傾け、
そしてさまざまな個所でひび割れるだろう。

そして、ミミズは肉の割れ目に潜み、
アブラハムの懐のように、僕の中で転がり回るだろう。
そして誰かがやって来たら、　僕を獣と呼んで、病院の唾壺のように僕の墓に唾を吐いてくれるように頼むだろう。
地面に撒き散らされた唾で他の人が感染しないようにするためだ。
説教壇は司祭を懇願するだろうが、誰もいないだろう…

セスト・パルス（ルーマニア）

僕の口の中には水たまりができるだろう 。最も臭い化学者の 研究室のように、硫化水素の水たまりだ。
そして、オオカミたちは通り過ぎて人間のように笑い、 豚たちは皆、ぼろ布で鼻をふさぎ 、僕は腐った骨のような黄色い笑い声となり 、世俗的な腐敗の臭いを放つだろう。
それは、カラスやフクロウが避けるように、臭い歯を死滅させた腐敗だ。
そして、オオカミたちは森の中で笑い、 木々から葉を引きちぎり、木々を寒さで凍らせるだろう。
獣にしてはあまりにもボロボロだったから。

交響楽団とジャズオーケストラを結成するためだけに… お願いだから、獣が死んだなんて言わないでくれ 、石碑から「獣」という言葉を消さないでくれ。 豚が死んだと真実を言った方がいいよ。だって、
☆
だから、今、自分自身と仲直りさせてくれ。
世界は目のように飛び去り、目は一日のように飛び去った。一日は過ぎ去ったのだ。
僕は友人として来て、敵として去った。
一人の人が通り過ぎ、さらに二人が簡単に、もっと簡単に通り過ぎるだろう。
きみはどこにいるのだ?
僕はきみた汚くて醜いと云った。
僕の喉に刺さったナイフが傷を作った。
僕の胸は丸い石になった。
また一人の人が通り過ぎる。

セスト・パルス（ルーマニア）

月は深い狂気の中にいて、
空に一人残っていた。
僕は月をずっと背中に歩いてきたが、理解するのが遅すぎた。
空は汚れていて、月はらい病のようで、星は化膿した腫れ物だということを。僕には何も残っていない。僕はこのように一人で歩いている。

☆

朽ち果て、今にも倒れそうなフェンス。

誰も泣かず、
誰も笑わない庭 。誰も通らない
通りの向こうに。 同じ虚空の中で、僕らは何も聞こえなかった。誰もいない、 何もない端で。
そうやって僕らの魂は 同じフェンスで結ばれていたのだ…

セスト・パルス（ルーマニア）

☆OC, 二十歳

なぜ血の鍾乳石が滴るのか？
単純なAがきみの誕生、単一のZが終わりだ。
きみは少し笑うかもしれないし、たくさん笑うかもしれない。
それでも、魂の足の裏に一本の棒が刺さると、魂は自らを踏みつける。
だからこそ魂なのだ。もしそれが依然としてすべてであるなら、それはきみにとっても、きみたちのものにとっても、きみたちのものにとっても同じことだ。

クズ野郎

このクズ野郎！

☆Sesto Pals, Avant-garde Poetry and Other Poems, 1930-1955、Tracus Arte Publishing House、ブカレスト、2015年、27ページ。

ポルノ

雲は月の下に横たわり、

月は雲の上に横たわった。　「一緒に 天国の寝室へ行こう」　僕たちは盛大な結婚式を挙げる。星だけ、風だけ 。月よ、きみは僕の妻になる。地上の旅路で 、小さな星たちと 僕たちは「天国のように」過ごす。　もう謎はなくなる。

★

「アルガイスト」の友人たちは、戦間期、そしてその一部は戦後も第二波シュルレアリスム（ゲラシム・ルカ、D・トロスト、パウル・パウン）の潮流の中で詩作とジャーナリズムの活動を続けていた　MF

☆

そして、僕が他に言うべきことは何もない。

ただ、この夜
剣を抜いた狂王が
山々を丘に
一本の木を狼に変えたのだ

★
セスト・パルス

夢の論理が支配的であり、しばしばシュルレアリストの論理と交差する修辞法：フクロウやコウモリ、あるいは夜空を飛ぶ他の鳥ではないにもかかわらず、僕はきみをまるで僕の過去の一瞬、僕の記憶のように見ている。

もしかしたら、言葉の糸で織りなされた狂気の衣をまとい、きみは夜をさまよい、街の隅で泣き叫んでいるのかもしれない。あるいは、古い鐘楼で鐘の狂気が起こるのを待っているのかもしれない。

僕は自分自身の中に降り立ち、自分の外側から、僕の中で何が起こっているのかを見つめようとする…僕は科学を行おうとはしない。なぜなら、今はありのままの僕自身、つまり理性とそれに対応する感覚を欠いた動物、獣としての僕自身を探求したいからだ。

MARIKO'S TRAVEL BAG
COMMON DESTINY / 存在の残香

7 廉吉よまだ逝くな

Don’t go yet, Renkichi!

８　恭次郎の叫び

Kyojiro’s cry

プロフィール/PROFILE

すみくらまりこ（日本）

詩人、翻訳家、編集者。１９５２年京都生れ。立命館大学文学部卒業。日本国際詩人協会代表。国際詩誌「詩の架け橋：天橋」編集主幹。

翻訳 ： 国内外の現代詩人作品を翻訳。JUNPA BOOKS　シリーズ 200 冊余を手がける。『御名を唱えて』（原著 Gabriel Rosenstockの "Uttering Her Name")は２０１２年アイルランド文学交流協会より翻訳出版賞を受賞。『弾丸シュート』（原著Odveig Klyve の"Bullistic" は２０１９年ノルウェー文学普及協会（ＮＯＲＬＡ）より翻訳助成を下付される。ダンテ・マッフィアの全俳句、５万句翻訳。万句集、新万句集、新俳句、考察シリーズは電子全集に所収。

主な著書：『心薫る女』『夢紡ぐ女』『光織る女』『愛装ふ女』『地抱く男』（いずれも竹林館）

『マリア・サンブラーノの詩学』『コロナ哀歌』

海外出版

「愛は不思議な方程式」（ルーマニア）、「夢紡ぐ女」（エストニア）、「愛の二重奏」ポーランド、「春」イタリア、「Místico Haiku 」（スペイン）「春」（イタリア）2025（アルバニア）2026　ボグダン社

共著

『式の二重奏』『花の二重奏』『雲の二重奏』『鳩の二重奏』『絹の二重奏』『森の二重奏』

招待参加：２０１１年ヤン・スムレク国際文学祭（ブラティスラヴァ、スロバキア）、２０１５年コモ詩祭—Europa in Versi—（コモ、イタリア）、２０１５年ミハイ・エミネスク国際詩祭（クラヨバ、ルーマニア）、２０１９年プリマ・ヴィスタ国際文学祭（タルトゥ 、エストニア）、上海国際詩祭（中国、上海）に招待参加。

受賞歴：２０１７年セルビア、パンノニアン・ゲレブ詩祭出版賞を受賞。２０１８年オーストリア・ウィーン国際文学祭ミロシュ・ツルニャンスキー賞、ナジ・ナーマン文学賞（名誉賞）、２０２０年ヨーロッパ科学芸術文学アカデミー国際詩賞、２０２５年イタリア、トゥリオラ・レナート・フィリッペリ(TRF)世界賞外国作家賞、２０２６年イタリア、レギウム・ジュリ財団「文化のための人生」国際賞

長年にわたりスペインの哲学者マリア・サンブラーノの思想を深く愛好し、丸善出版社『スペイン大事典』では同氏の項目執筆を担当。これまでに寄せた論考をまとめた論集『マリア・サンブラーノの詩学』を手がけるなど、その「詩的理性」の火を独自の詩作を通じて連綿と表現し続けている。

Mariko Sumikura

Poet, translator, editor. Born in Kyoto in 1952. Graduated from the Faculty of Letters, Ritsumeikan University. Representative of Japan Universal Poets Association of Japan. Editor-in-Chief of the international poetry magazine "A Bridge of Poetry: Ama-Hashi" Translation: Translates works by contemporary poets from Japan and abroad. Works on the 200 books of JUNPA BOOKS series. Her work "Uttering Her Name" (based on Gabriel Rosenstock's "Uttering Her Name") won the Irish Literary Exchange Association's Translation and Publication Award in 2012. "Bullistic" (originally written by Odveig Klyve) received a translation grant from the Norwegian Association for the Promotion of Literature (NORLA) in 2019.

Translated all of Dante Maffia's haiku. Includes the Manshu 2021, New Manshu 2023, New Haiku 2024, Reflection Series 2025, and the 50-volume Collected Works 2026.

Major publications: "The Woman Who Fragrances the Heart," "The

Woman Who Weaves Dreams," "The Woman Who Weaves Light," "The Woman Who Dresses in Love," and "The Man Who Embraces the Earth" (all published by Chikurinkan). 2010:

Overseas Publications："Love is a Mysterious Equation" (Romania), "The Dreamer" (Estonia), "Duet of Love" (Poland), "Spring" (Italy)（Albania）

Co-authored book："Duet of Formula" with Laura Garavaglia, ”Duet of Flowers” with Hanane Aad, "Duet of Forests" with Gabriel Rosenstock, "Duet of Silk" with Mikhail Sinelnikov, "Duet of Clouds" with Juri Talvet

Invitated participation: 49th Struga Poetry Festival (Struga, Macedonia), 2011: Jan Smrek International Literary Festival (Bratislava, Slovakia), 2015: Como Poetry Festival - Europa in He was invited to participate in the Versi (Como, Italy), the 2015 Mihai Eminescu International Poetry Festival (Craiova, Romania), and the 2019 Prima Vista International Literature Festival (Tartu, Estonia), Shanghai International Poetry Festival (online).

Awards: 2017 Publication Prize at the Pannonian Geleb Poetry Festival in Serbia; 2018 Miloš Crnjanski Prize at the Vienna International Literature Festival in Austria, 2018 Honorary Nagy Naman Literature Prize; 2020 International Poetry Prize from the European Academy of Sciences, Arts and Letters; 2025 Tulliola Renato Filippelli (TRF) World Prize for Foreign Writers; and more.

Having deeply cherished the philosophy of the Spanish philosopher María

Zambrano over many years, she was entrusted with authoring the entry for Zambrano in The Encyclopedia of Hispanic Studies (Maruzen Publishing). She has compiled her academic essays into the volume The Poetics of María Zambrano, continuously embodying the flame of "poetic reason" (razón poética) through her own unique poetic creations.

Mariko Sumikura

Poeta, traduttore, redattore. Nato a Kyoto (1952), laureato alla Ristumeikan University. Rappresentante della Japan Universal Poets Association, caporedattore della rivista internazionale online "Poetic-Bridge: Ama-Hashi".

Pubblicazione principale: "Kokoro Kaoru Hito"," Yume Tsumugu Hito"," Hikari Oru Hito", "Ai Matou Hito"," Tsuchi daku Masurao".(Chikurinkan)

Pubblicazioni estere: "L'amore è un'equazione misteriosa" (Romania), "Il sognatore" (Estonia), "Duetto d'amore" (Polonia), "Primavera" (Italia) （Albania）

Co-autore di libri:”Duet of Formula”con Laura Garavaglia. "Duet of Flowers" con Hanane Aad, "Duet of Forests" con Gabriel Rosenstock, "Duet of Silk" con Mikhail Sinelnikov, "Duet of Clouds" con Juri Talvet

È stata invitata a diverse letture di poesie internazionali come la 49a Struga Poetry Letture nel 2011, Jan Smrek International Literary Festival nel 2012. "Europa in Versi"(Como, Italia) nel 2015. Mihai Eminesuc International

Poetry Festival (Craiova, Romania) nel 2015.Prima Vista Literature Festival（Tartu, Estonia) nel 2019. Shanghai International Poetry Festival (online).

Traduzione: Poesia contemporanea in-fuori dal Giappone, Serie JUNPA BOOKS, Premio: "Mina wo Tonaete" ("Uttering Her Name" di Gabriel Rosenstock) ha vinto il Translated Irish Literature Award dall'Irlanda Literature Exchange nel 2012.Dante Maffia Haiku "Diecimila Haiku" 22 volumi 2021, "Nuovo Diecimila Haiku" 20 volumi 2023

Il primo premio al festival Pannonian Galeb festival per il libro di poesie tradotto in serbo nel 2017. Milos Crnjanski Prize in International Literature Festival-Wien 2017, Naji Naaman Literary Prize (Honour) 2018, European Academy of Science, Arts, and Literary International Award for Poets 2020. Tulliola Renato Filippeli (TRF) World Prize for Foreign Artists 2025.

Nutrendo da molti anni un profondo amore per il pensiero della filosofa spagnola María Zambrano, le è stata affidata la stesura della voce a lei dedicata nella Grande Enciclopedia di Studi Ispanici (Maruzen Publishing). Autrice della raccolta di saggi La poetica di María Zambrano, continua a esprimere costantemente la fiamma della "ragione poetica" (razón poética) attraverso le sue creazioni poetiche uniche.

SERIES CONTENTS

PREFACE MARIKO SUMIKURA

VOLUME 1: EASTERN LIGHT & EUROPEAN AFTERGLOW

VOLUME 2: MARIA ZAMBRANO

VOLUME 3: MYSTICAL FORTUNE & LINGERING FRAGRANCE

VOLUME 4: CYBER-CITY & KENON

VOLUME 5: SKETCHES IN TRAVEL

VOLUME 6: OPERA & CYBER CHRONICLES

VOLUME 7: FUEL OF EXISTENCE

VOLUME 8: THE GOLDEN DROPPER: THE LAST PERFUMER

VOLUME 9: STAR NEWS - STAR BUBBLES

VOLUME 10: THREADS OF INVISIBLE EXISTENCE

VOLUME 11: MOTHER OF WATER, I WANT TO BE SWAYED BY THE TEARS OF THE STARS

MARIKO’S TRAVWL BAG 1

/ Mariko Sumikura's Poetry Collection

【COPYRIGHT & ALL RIGHTS RESERVED】 © 2026 Mariko Sumikura & JUNPA BOOKS. All rights reserved. No part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording, scanning, or otherwise, without the prior written permission of both the copyright owner and the publisher of this book. In accord with international copyright treaties, any unauthorized conversion into digital formats, data-mining, or artificial intelligence training utilization of these poetic texts is strictly prohibited.

【DIRITTI D'AUTORE E RIPRODUZIONE RISERVATA】 © 2026 Mariko Sumikura & JUNPA BOOKS. Tutti i diritti riservati. Nessuna parte di questa pubblicazione può essere riprodotta, memorizzata in un sistema di archiviazione o trasmessa in qualsiasi forma o con qualsiasi mezzo, elettronico, meccanico, fotocopiatore, registrazione o altro, senza il preventivo consenso scritto del proprietario del copyright e dell'editore.

【ACKNOWLEDGMENT OF THE LITERARY MANUSCRIPT】

---------- o

【PRODUCTION CREDITS】

■ Author / Autore / 著者 Mariko Sumikura (すみくらまりこ)

■ Publisher / Editore / 発行元 JUNPA BOOKS (Japan Universal Poets Association / 日本国際詩人協会) Kyoto, Japan

■ Preface / Prefazione / 序文 Dante Maffia (ダンテ・マッフィア) ■ English & Italian Translation / Traduzione / 対訳監修 JUNPA Editorial Board

■ Cover Design & Art Photography / Copertina e Fotografia / 装丁・写真 Mariko Sumikura (すみくらまりこ)

【DIGITAL EDITION DETAILS】

■ Format: Amazon Kindle International Edition

■ Production Location: Produced and Type-set in Kyoto, Japan

■ First Edition: August 2026